

「理」・「化」の解

成蹊大学法学部教授 光田 剛



「理化教育」の「理化」は、一般的には、「物理」と「化学」を合わせて表現することばとして使われているようである。そのなかで、成蹊学園には、「理化」を「自然現象をありのままに観察し、測定し、または記録して、それらの考察から何らかの概念や法則を帰納すること」と捉えて、そうした考えに基づく教育を「理化教育」と表現する伝統がある。

そこで、法学部政治学科で私が担当している授業の学生たちに、「理」と「化」という漢字から、その字を含むどんな単語を思い浮かべるか、またそこから感じ取れるその字の意味は、ということ聞いてみた。そこで出てきた答えの一部を紹介する。

「理」については、「理由」「道理」「総理」「経理」「修理」「推理」「理屈」「処理」「管理」「代理」「倫理」「義理」「真理」「理事」などの単語が挙げられた。その意味には「ことわり」「根本」「正しい考え」「まろく収める」「はっきりしている」などが挙がった。

「化」については「化学」「化石」「道化師」「進化」「酸化」「文化」「変化」「化粧」「開化」「羽化」「美化」「劣化」など、共通の意味は「化ける」「移り変わる」「どういう理屈でそうなっているのかが説明できること」などであった。

どうだろう？

私自身は「理化教育」ということばから想定されているイメージよりもさらに幅広い意味を「理」や「化」の文字は持っている、と感じた。

「理」は「里」と「玉」から成り立っている。「里」とはあぜ道で四角く仕切られた畑のある場所のことである。中国には米を作る「田」とそれ以外の作物を作る「畑」の区別はない。「はたけ」も含めてすべて「田」である。「里」という字ができた時代に整然と四角く区切られた畑があったかどうか、私はよく知らない。しかし、「四角く区切られた畑」を前提とした「井田」という構想があったぐらいだから、少なくとも「畑は四角く整然と区切られているべきだ」という理念はあったのだろう。

四角く区切られた里の畑と同じように、玉（ぎよく）を整然とカットする。それが「理」という文字の起こりだとされる。そこから、整然となるように、規則正しく「おさめる」という意味が生まれた。ここでいう「玉」とは球形の宝石（「たま」）のこととは限らない。翡翠、軟玉など美しい鉱物のことで、文字が使われるようになる前から中国文明ではこれを使った「玉器」が作られてきた。「完璧」（「璧をまっとうする」）の「璧」はそういう玉器の一種である。

ところで、中国では、儒教・儒学は、漢（前漢）の末から後漢にかけて（だいたい紀元前1世紀から3世紀にかけて）隆盛の時期を迎えた後、仏教や道教に押されてその地位が低下した。唐の時代には儒教・仏教・道教の「三教」の一つと位置づけられていて、儒教・儒学の地位はそれほど高くなかった。

その儒学が唐の後期から復活するなかでキーワードとなっていた概念が「理」だった。華厳仏教の壮大な世界観・宇宙観に対抗するためだったともいう。「理」をキーワードとした儒学は宋（北宋）・南宋時代に復活を遂げ、14世紀以後、20世紀初めまでの中国で支配的な思想となる。この流れを「理学」などという。

この「理学」によれば、宇宙を貫く絶対的な法則が「理」である。「天」はその「理」が貫徹している

理想世界である。しかし、地上世界は、さまざまな物質（その素材と考えられていたものが「気」である）が複雑に動いているので、「理」が実現していない。そこで、人間がやるべきことはその「理」を人間世界に実現することである、ということになる。この考えかたが朱子学に大成される。

そのため、朱子学には、「理」を実現するためには命さえ軽んじるという過激（「矯激」）でダイナミックな性格と、一つの「理」を見極めるために観察と思考を突き詰める観照的な性格との両方が生まれた。朱子学が中国（明・清）でも朝鮮でも日本でも「体制教学」化していくなかでそのダイナミズムを失ったとされるが、ほんとうにそうかということは私の判断能力を超える。

それよりも、ここで強調したいのは、この理学・朱子学は、いま言う意味での「理」系の学問の発展と密接に関係しつつ発展して来たという点である。天体を観測すれば、天体の動きは「法則」に従っていることがわかる。そのことが、「宇宙には「理」が貫徹している」という発想を支えた。また、江戸時代の日本では、朱子学的な名分論が強かった会津で天体観測が熱心に行われていた。会津若松にはいまでも藩校日新館の天文台跡が残っていて、2019年、日本天文遺産に指定された。

「天の法則は地上でも貫徹しているはずである」という発想自体はニュートン力学にも通じるものがある。それを儒学的な倫理に結びつけて論じたところは、現在の「理」系的な発想からするととても稚拙に見えるかも知れない。しかし、「人間が正しく調和して生きるためには、全宇宙を貫徹する法則を知ることが重要である」という発想を、いま、私たちは簡単に否定できるだろうか？

「化」については、左側の「人」（にんべん）が右側でひっくり返った姿を表現しているという。この文字は、儒教・儒学的な伝統のなかでは、立派な人格（「徳」）を持つ王者が人びとを感化するという意味で使われることがあった。

日本の元号でも、「最初の元号」とされる「大化」や「文化・文政時代」の「文化」、その少し後の「弘化」などに「化」の文字が使われている。また、「平成」改元の際には「正化」、「令和」改元の際には「久化」と、「化」を含む案が最終候補まで残ったとされる。もちろん「化」の字は「化ける」という意味でもさまざまに使われてきたのだが、儒教・儒学的には、「人格的な影響で人や世のなかをよい方向に変化させる」という意味もずっと存在してきた。

こういうことを考えると、「理」に「理系」や「物理」だけを代表させ、「化」に「化学」だけを代表させるのは、もちろん不適切ではないけれど、「もったいない」ということが言えるのではないかと、「文系」の立場からは思う。人間の世のなかを考えることと、「物の理」や「天の理」を考えることを関連させる。物質の変化を考えることと人の変化すべき方向を考えることを関連させる。そういう発想法がSDGsの時代には必要とされているのではないかと思う。

筆者のプロフィール

光田 剛（みつた つよし）

成蹊大学法学部教授、東洋政治史担当。専門は中国近代政治史。